

だった。藪にござる寝、五高の寮敷と教わり、春風に仮眠した後、下山して池橋橋を渡り、篠崎公園の堤の桜を見る。

あのとき、飯盒飯はうまかった。

### ⑤ 鮎・鯉・鱒

藤原義江なる日本一の歌手が、明冷座に来た。東京出身の海軍ヤンは、寄席と呼んでいた。田舎の若者は大拳してこの劇場に押しかけた。

下足番に下駄をあずけて席につく。「禁煙」を厳守した小さい劇場に、日本一の歌手の音が響く。岡田と宮崎の二人は誘われて小生も聞いたが、音楽はうといので余り感銘はなかつた。万雷の拍手が二度三度、そして興奮の衆も散る。

三人で、池船橋のさわやかな風が吹かれる。五高生の岡田と、山口高校生の宮崎が話している。「愛」だとか「恋」だとか、何のことやらんかと耳をそばだてる。さ、さ、藤原義江が歌った曲目の中のことらしい。小生が「愛」ときいたのは「鮎」、「恋」ときいたのは「鯉」のことらしい。そのうちに、おれは「鱒」ではないかと言っていた。

このとき、両兄が遙か彼方に遠くで、小生の及落伍者のような気がした。これでは駄目だ。俺も二人について行くように努力せねばと、上京の決意した。昭和二十二(三)三年の春だった。

佐伯の食べ物やしめくくりは、尊敬する両兄の話題になった。鮎・鯉・鱒である。

この魚、昔のまま、小生の友人の味をいつまでも残している。(おわり)

### 追憶記

### 長良貝塚を調査

— 二十三日佐伯史談会 開催 —

佐伯史談会では二十三日午後一時から、下堅田村鶴山安藤正人氏宅で例会を開くが、同日は鶴山城址から長良貝塚・上野台遺跡等を見学、さらに貝塚では少時発掘を行い、長良神社社家足田泉氏宅で講評又は懇談を行う予定。

右は昭和二十四年十月十四日付の週刊郷土紙「佐伯新聞」(社長山本栄)の記事である。今から約三十年前のことで、今福岡に居られる佐藤貫一氏から、本会に寄贈された終戦直後の郷土新聞の綴りの中のものについて記事である。

三十年もたつと随分様子が変わるものである。この佐伯史談会は勿論私どもの佐伯史談会でなく、終戦後増村隆也氏を中心に出発らしい。

勤めて退任、この時は宇山の自宅に自通されていた、恐らく文化人として郷土の歴史や旧跡について、深い関心をもつて、たのび、後の会場を引受けたものであろう。

足田泉氏は、私どもの史談会には顧問として、十数年前にこれらの現地研習を案内下さっている。しかし、以上三氏共今は故人であるが、この時の調査・懇談会に、今日わが史談会員で参加したものがあろうか。もしあり

とすれば、それは宇田・佐藤両氏位ではあるまいか。下城遺跡・長良貝塚の発掘・学術調査が行われた、その次の年のことである。

(おわり)